

提案授業における成果と課題

【はじめに】

今年度は3, 4年生の外国語活動が研究対象となり、学校教育において外国語への興味・関心を高め素地を養う時期の外国語(英語)教育の充実を図るための示唆に富んだ研究となった。同時に、附属小学校の研究テーマである「自律した学習者を育てる」とシームレスに連動させ得ている点が特筆に値する。

【成果】

1. 探究

研究の最大の収穫は、「探究」という概念を外国語活動の中に落とし込み具現化した点にあると言える。山崎麻絵教諭の3年生の授業も佐々木絵理子教諭の4年生の授業も、ひとりひとりの児童が自分の経験、興味・関心、学びやすさを大事にできる「探究」を基軸として展開する授業となっていた。探究と一口に言っても、単元計画や本時の授業で、児童を具体的に動かすためには入念な教材研究・準備、発問、予測、気づきへの仕掛け・発生・導き、クラスルームマネジメント等々を考え始めると、容易でないことがすぐにわかる。その実践例として、外国語教育でどのように可能であるかをわかりやすく提案できたことは、言語習得という分野に外国語の学習を押し込めずに、学校教育の目標に貢献しているカリキュラムの重要な歯車となっている(付け足しではない)外国語活動を提案できたのではないだろうか。この探究の具現化は、「自律した学習者」を育てることと、「外国語に慣れ親しみ、体験的に理解する」という初学者を育てることを上手く融合させ、外国語活動の理想的な在り方を提示することに挑んだ非常に意義のある開拓性の高い実践である。

2. アナログとデジタル

「アナログとデジタル」のいいとこどり、すなわち適切な方法のいずれかを選択または適宜双方を関連させるといふ点からも、学ぶことの多い2つの提案授業であったと言える。

ICTの活用が推進されている現在、実践研究においても工夫の提案が期待されている。4年生の佐々木絵理子教諭の実践では、「ICT機器を用いた自己選択型のモデル提示は、自分の必要なタイミングでモデルを確認したりインプットしたりするツールとなり得た」と省みているように、活動に必要なインプットを児童が自主的に取り出し学習に役立たせることができるという点で、個別最適な学習の提案となっている。この自主的インプットの取り出しを「活動と組み合わせた」点がとても効果的である。言語使用と言語学習が同時進行するための手立てである。

一方、3年生の山崎麻絵教諭の授業では、児童たちを野に放ち遊ばせるような活動を設定した。その教材は温かみ溢れるアナログの学習環境を創出していた。「アルファベットさがし旅(タブレットでの撮影はあったが)」「アルファベット作りの里」「かくれんぼの森」「仲間分けの谷」と称された活動を通して、児童は心ゆくまで遊びながら探究している姿を見せていた。

「手」で触り、動かし、言葉を使いながら関わっていくという児童同士、先生と児童の姿に、初学習者の五感を総動員させて落ち着いて楽しませるといふ授業コンセプトが随所に垣間見られ、言語習得という領域を超え、学校教育カリキュラムの中での存在を高めた外国語活動の提案であったと解釈できる。

【課題】

2つの授業の共通項は「どっぷりと浸かる」といふ点にある。活動に夢中になる児童の真剣な表情や笑顔は、その達成を示していた。今後の課題のひとつは、恐らく「自由や選択された遊びを、知的理解に昇華させる」教師の役割ではないだろうかと感じた。この点は私自身断念を避けたいところではある。児童が遊びに夢中になっている、楽しさや喜びの感情を台無しにしないような学びへの昇華がなされ得るのではないかと、ぼんやりながら見えている部分がある。それは、「意味を最重視しながら言語形式に注意を向けさせる(= Focus on Form)」という枠に止まらない、もう少し教育的価値が感じられるような方法であると思われる。「協働的な省察」が生まれるしかけをもっと研究し工夫することで、児童の知的好奇心が高まり、遊びに止まらない知的理解を楽しむ学習者を育て得るのではないかと想像する。

もう一つの課題は、学習歴の有効活用、すなわちポートフォリオ(例: English Passport)の学校全体としての組織的構築であると思う。

主体性を重んじた言語形式の指導は、今後さらなる発展充実が望まれる。

【まとめ】

来年度の研究が楽しみとなる価値ある今年度の授業実践研究であった。この飛躍を確実につなげ、「探究」をキーワードとして、多くの工夫を試行錯誤していくことを期待する。